

これも今は昔、堀川兼道公太政大臣と申す人、(注1)世心地大事に煩ひ給ふ。御祈どもさまざまにせらる。世にある僧どもの参らぬはなし。参り集ひて御祈どもをす。殿中騒ぐこと限りなし。

ここに極楽寺は、殿の造り給へる寺なり。その寺に住みける僧ども、「御祈せよ」といふ仰せもなかりければ、人も召さず。この時にある僧の思ひけるは、御寺にやすく住むことは、殿の御徳にてこそあれ。殿失せ給ひなば、世にあるべきやうなし。召さずとも参らんとて、仁王経を持ち奉りて、殿に参りて、物騒がしかりければ、中門の北の廊のすみにかがまり居て、つゆ目も見かくる人もなきに、仁王経を他念なく読み奉る。

二時ばかりありて、殿仰せらるるやう、「極楽寺の僧、なにがしの大徳やこれにある」と尋ね給ふに、ある人、「中門の脇の廊に候ふ」と申しければ、「それ、こなたへ呼べ」と仰せらるるに、人々怪しと思ひ、そこばくのやんごとなき僧をば召さずして、かく参りたるをだに、よしなしと見居たるをしも、召しあれば、心も得ず思へ

ども、行きて、召す由をいへば参る。高僧どもの着き並びたる後の縁に、かがまり居たり。「さて参りたるか」と問はせ給へば、南の簀子すのこに候ふよし申せば、「内へ呼び入れよ」とて、臥し給へる所へ召し入れらる。

無下むげに物も仰せられず、重くおはしつるに、この僧召す程の御気色、こよなくよろしく見えければ、人々怪しく思ひけるに、のたまふやう、「寝たりつる夢に、恐ろしげなる鬼どもの、我が身をとりにどり(注2)に打ちれうじつるに、(注3)びんづら結ひたる童子の、(注4)楯すはえ持たしたるが、中門の方より入り来て、楯してこの鬼どもを打ち払へば、鬼どもみな逃げ散りぬ。『何ぞの童のかくはするぞ』と問ひしかば、『極楽寺のそれがしが、かく煩はせ給ふ事、いみじう歎なげき申して、年ごろ読み奉る仁王經を、今朝より中門の脇に候ひて、他念なく読み奉りて祈り申し侍る。その聖の(注5)護法の、かく病ませ奉る悪鬼どもを、追ひ払ひ侍るなり』と申すと見て、夢覚めてより、心地のかい拭ぬぐふやうによければ、そのよろこびいはんとて、呼びつるなり」とて、手を摺すりて拝ませ給ひ

て、棹さざにかかりたる御衣おんせを召して、**かづけ給ふ**。「寺に
帰りてなほなほ御祈よく申せ」と仰せらるれば、よろこ
びてまかり出づる程に、**僧俗の見思へる気色やんごと**な
し。中門の脇に、ひねもすにかがみ居たりつる、おぼえ
なかりしに、ことの外美びび々しくてぞまかり出でにける。
されば人の祈は、僧の浄不浄にはよらぬ事なり。ただ
心に入りたるが験げんあるものなり。

(注)

- 1 世心地：流行病。
- 2 打ちれうじつる：打ちさいなんだ。
- 3 びんづら：少年の髪かみの形。
- 4 楯たて：細長ほそながくのびた杖つえの杖。
- 5 護法ごほふ：護法童子ごほふどうしのことで、仏法やその使者を守護する童子姿どうしすがたの善神。

これも今となつては昔の話だが、太政大臣堀川兼道公と申し上げる人が、流行病にかかつて重態におなりになつた。(病氣平癒のための)ご祈祷を色々なさる。世間で認められた僧たちで(堀川兼道公のご祈祷に)参上しない者はいない。邸内では騒ぐことこの上ない。

さて極楽寺は、堀川公がお建てになつた寺である。その寺に住んでいた僧たちは、「ご祈祷せよ」というご命令もなかつたので、誰も(この寺の僧たちを)お呼びにならない。この時に(極楽寺の)ある僧が思ったことは、極楽寺に安心して住むことは、堀川公のおかげである。殿がお亡くなりになつたならば、生きていられる方法もない。お呼びにならなくても参上しようと思つて、仁王経をお持ちして、(堀川公の)屋敷に参上して、(邸内が)立て込んでいたので、注文の北の廊下の隅にかがんで座つて、全く目をとめる人もいないのに、仁王経を一心不乱にお読み申し上げます。

二時(＝四時間)ほど経つて、堀川公がおっしゃることは、「極楽寺の僧で、何とかという大徳はここに来ているか」とお尋ねになるので、お側にいる人が、「中門の脇の廊下に控えております」と申し上げたところ、「その僧をこちらに呼べ」とおっしゃつたので、人々は奇妙なことだと思ひ、多くの尊い僧はお呼びにならず、このように参上したことをさ意味がないと周りが見ている僧を、(堀川公が)お呼びになるので、(人々は)理解できないと思うが、行つて(堀川公が)お呼びだという旨を言うと(極楽寺の僧は)参上する。高僧たちが居並んでいる後ろの縁側に(極楽寺の僧は)かがんでいた。(堀川公が)「さて(極楽寺の僧は)来たか」とお尋ねになるので、南の縁側に控えているという旨を(人々が)申し上げると、(堀川公は)「中へ呼び入れよ」と言つて、横になつていらつしやる所へ(極楽寺の僧を)呼び入れなさる。全く物をおっしゃることもなく、重病でいらつしやつたのに、この(極楽寺の)僧をお呼びになる時のご様子は、格別に良く見えたので、人々は不思議に思つていると、(堀川公が)おっしゃるには、「寝ていた時の夢で、恐ろしそうな鬼たちが、私の身体を様々に打ち叩いたが、びんづらを結つた童子で、木の枝の杖を持った者が、中門の方から入つて来て、その杖でこの鬼たち

を打ち払うと、鬼どもがみな逃げ去ってしまった。『何という童子がこのようにしてくれたのか』と訊ねたところ、『極楽寺の誰それが、このように（あなた様が）病気を患っていらっしやることをたいそう嘆き申し上げて、長年読み申し上げていた仁王経を、今朝から中門の脇に伺候して、一心に読み申し上げて祈り申し上げています。その聖の（信仰している）護法童子が、このように（あなた様を）煩わせている悪鬼どもを、追い払ったのです」と申し上げると（いう夢を）見て、夢が覚めてから、（悪かった）体調が拭うように良いので、その礼を言おうと思って、呼んだのである」と言って、手をすって、（極楽寺の僧を）拝みなさって掉にかかっていた御衣をお取り寄せになって、（ほうびを）与えなさる。「寺に帰ってなおいっそうご祈祷せよ」とお命じになるので、（極楽寺の僧が）喜んで退出する時に、僧や屋敷の人たちが、（極楽寺の僧が喜んで帰って行く姿を）見て（すばらしいと）思っている様子は並々ではない。中門の隅で、一日中かがんでいたのは注目されなかったのに、格別華やかに退出したのだった。したがって、人の祈りは僧の貴賤によって（ご利益が）左右されないのである。ひたすら一身に祈ることが靈験のあるものである。